新潟の水辺だより Vol.44

●編集発行・新潟の水辺を考える会　●発行日・1998年3月27日　Vol.44

TOPICS

信濃川ウォーターシャトル計画

『誰もが気軽に利用できる
ちょっと素敵な船を信濃川に浮かべます。』

信濃川ウォーターシャトル株式会社
発起人総代　栗原　道平(寄稿)

既に新聞、テレビの報道でご存知の方が多いと思いますが、弊社は西暦2000年3月1日(平成12年3月1日)を開業予定として水上交通事業を開始することを目標に、新潟市内を中心とする若手経済人と市民有志により設立された会社です。(正式に言うと、資本金5千万円で3月20日に設立される予定です。)

信濃川ウォーターシャトル計画と聞いて、いったい何をやる計画なの?と思われる向きもあろうかと思います。皆さんは、アメリカNASAのスペースシャトルについては、よくご存知と思います。NASAの壮大な計画に比べれば、ほんのささやかな計画ですが、県都新潟市のど真ん中を流れる信濃川に、誰もが気軽に利用できる素敵な船—水上バスを運航しようという計画です。当初の航路として、ふるさと村を起点に、東関屋駅、県庁前、文化会館前、万代シティ、万代橋西詰に立ち寄り、再開発事業が進められている万代島までの9.5kmの区間を約35分で結び、15分から20分の間隔で運航する予定です。出発時間を気にせず、乗りたいときに気軽に乗船できるよう、頻繁に運航する水の上のシャトル(いったりきたりするという意味)ということで「ウォーターシャトル」と名付けてみましたが、夢があって、心ときめく感じのネーミングと、今のところ評判は上々のようです。

就航する船は、19トンのJCIと呼ばれるカテゴリーに属する船を考えており、全長が約23メートル程度の大きさで、約百人の乗客を乗せることができます。会社の経営採算上の見地から、JCI船としましたが川幅約200～300メートルの信濃川河口部に浮かべることを考えた場合、ちょうど良い大きさではないかと思っています。信濃川の大河としてのイメージ(日本国内の河川としては)を損なわず、万代橋などの万代橋などの建造物もほどよいプロポーションで引き立たせるようになると思います。

このサイズの船は、法廷の点検設備費用が20トンを超えるJG船に比べて格安で済む他、1級小型船舶操縦士による操縦が許されており、人件費を抑えることができます。但し、弊社では船長(キャプテン)のほか、乗降の際の安全確保、航行中の乗客サービスのため、船長のアシスタントを兼ねた客室乗務員(キャビンアデンダント)との2名乗務による運航を考えています。乗降は、桟橋と段差のない後部乗降甲板から行えるようにし、自転車を押しながらでも短時間でスムースに行えるような設計にする予定です。乗降甲板はセミオープンとし、川風に吹かれながら航行を楽しめるようにし、乗降甲板の屋上には、橋梁等のクリアランスの関係から、実際には供用できる区間は限られることになりますが、展望デッキも設けて信濃川からの眺めを存分に楽しんで貰えることを考えています。

会社設立後は4月末を目途に1億円の増資を予定しており、設立時の5千万円と併せて、1号船の建造資金とします。船は、開業までに5隻建造する計画であり、1号船は早ければ、今年の秋にもその美しい姿を皆さんの前にお見せすることも可能です。実際に船をご覧いただいて、こんな船が信濃川に浮かぶならば、応援しようという市民の皆さんが、大勢いらっしゃることを期待しています。そんな、市民株式の応援により、支持されるような信濃川ウォーターシャトルであれば、必ずや経営的にも成功を収めることがができると確信しています。

県都新潟市を流れる信濃川に水上交通を復活させることは、少なからぬ人達が追い求めてきた夢でもあります。こんどこそ、この信濃川ウォーターシャトル計画により、その夢が実現できるよう頑張っていますので、各位の応援を宜しくお願い致します。

Opinion-1 オピニオン1

妨げることか手助けすることか・・・環境保護の実践

この地球上にどんな自然のシーン(場)があろうとも、なんらかの点で人間はその一部であり続ける。ほとんどすべてと言っていい程、私達はそのシーンの生物多様性を退化させ、破壊することさえしてきた。原始林で生きてきた種族達のように、地域によっては　人々は生物多様性を減少させずに自然の一部であったが、今では、それも悲しいことにひどく脅かされている。

私達の知らない無数の種については関与できないが、おおよそ知りうる生物多様性の喪失レベルは、国連を通じて各国政府がその保護のために地球規模の条約に調印したという深刻なレベルに達している。

保護とは何か？　個人的には私は「レット・イット・ビー(そのままにしておこう)」ということがほったらかしにしたり無視したりする事だとは思っていない。今日では原始林にしろ肥沃な湿地帯にしろ、たとえ木を切ったり狩をしたりしないほうがいいところでも、未来に自然の不思議を残すためには、活動的なレインジャーや研究者、観察員やガイド達が必要だ。

多くの自然が損なわれてきた今、人類の努力と理解で、私達が自然の一部であるということをもう一度認識すべき時だ。

日本が森を軽視してきたこと、原始林の最後に残されたところを伐採したこと、豊かな雑木林を単相針葉人工林に換えてきたこと、そして恐るべきコンクリートで固められた川、利用価値のない湿地を埋め立てたこと、私は今までこれらについて講演したり書いたりしてきた。そこで得た資金で、私の決意として、そまつに扱われ見過ごされてきた土地を買うために使うこと、そして生物多様性を改善するために自分のできることをすること、つまり明治時代以前の状態に可能な限り近づけるよう生物多様性を戻す努力をするつもりだ。ほとんど不可能な仕事だが。

私達は木を切り、刈り込み、植えてきた。ブルドーザーでならされ放置された場所で、排水も悪く、生物の棲める沼地にもなりようがなかったところに私達は大きな池を掘った。

池というヴィジョンはカエルや鳥達はもちろん、すべての水棲昆虫に活力を与えることになった。土手を維持し、生息場所をつくってやるために、私達はヤナギ、イグサ、ヨシ、ウォーター・アイリスや水藻を植えた。気のいい友人が私に相談しないで、鯉を池に入れた。

繁茂したものの一つは水藻であった。三回目の夏が過ぎる頃、水藻は池を覆い、カモ達が追いやられてしまった。八月の末、私は水藻をできる限り取り除くことに決め、それを土手に放り上げて広げた。それは土手の赤土に養分を与えることになるであろう。これは確かにうまくいった。私達の植えた桜の木は見事に大きくなったし、やがて他の多くの植物や、昆虫類がやってきて住みついた。

鯉も繁殖したし、まもなく渡り鳥のカモばかりでなく、カワセミまでがやってきた。やがて鯉は大きくなって私達が食べられるようになったし、鯉にとっても十分な水藻が食べられるし、残った水藻は鯉の卵を保護するシェルターにもなり、もう池を覆い尽くすほどには繁茂しなくなった。

「ハス採り大会」への参加に招かれた時、私は喜んでそれを受けた。たとえそれがカナダの野生を撮影する旅を途中で切り上げることになっても。驚く程多くのハスを見たとき、そしてここにはほとんど水鳥がいないと知った時、私が聞いていたことは本当だと確信した。周りの農業の肥料による水の富栄養化はハスを成長させ、水面を覆い尽くす原因となっていたのだ。

このような場合、地元が決断を下すことになる。私達はこのハスが広がり、湿地帯がハスだらけになるにまかせ、ついに浅い水面すべてを泥沼にするか、あるいは、あえてその調和を保つ手助けをし、水棲生物や水鳥の保護をするか。

ハスの一部は食べられるし、おいしいので、この試みはやってみる価値があると思った。ハスを取り除き、もちろん全部ではなく、食べられるところは食べて残りは素晴らしい農業用肥料のための堆肥にする。ことによったら、このような試みは以前にも行なわれたのではないか？人工肥料の必要性をなくし、水棲生物の保護を促進させる事を。

なにはともあれ、その試みは楽しく害もなかったし、いろいろな人達を一つにした。

しかし、そこでショックをうけたことは、ボランティアの一人がブラックバスを放流したいというのを聞いたことだ。私の言うことを信じてほしいが、このことは生態学上の犯罪と言ってもいい。これは、すでに前例のないスピードで日本国中で在来種に打撃をあたえている。

とても多くのハスが一面に広がっているので、それをどうするかということには集中的な組織的努力が必要だろう。個人的には、私はハス取りはしたほうが良いと思う。私がいつも信じてきたこと、そしてやってきたことは環境保護を実践することだ。そして多くの疎遠な、机にしばられた専門家達のためには時間を割きたくないということだ。

C.W.ニコル(寄稿)

(「水辺だより」43号に原文掲載／翻訳:大熊 宏子)

オピニオン2 opinion 2

会員のみなさまへ

川とは何だと、急に問われても、ちょっと考えさせてもらわないと答えに窮する。すぐ身近にあったものが、いつの間にか身辺から遠ざかっていってしまい、日々の暮らしとは縁遠いものとなってしまった。それで改めて、川はいつ頃どうしてできたのか、そして川との人間の暮らしぶりとは、どうかかわっているのか、その辺りのこと、もう一度よく考えなおしてみたい。普段は深く考えてみたこともなかったことだから、案外大事なことを見落としているかもしれないと思うからだ。

さて、川には普通、水が流れている。その水はどこから、どうしてやってくるのか、それがわからないとこの頃、水の流れていないインチキな川も現われてくるので、ごまかされないように気をつける必要がある。

46億年前頃、地球ができたというが、そのときの地球はまだ高温で、地上に液体としての水は存在し得なかった。したがって川も海も生まれてはいなかった。地球は次第に冷却し、地球をとり巻くガス体に含まれていた水素Hは、熱地球の時代に爆発を繰り返し消費してきたが、その約1%を残していた。重い酸素Oと結びついて熱水となり、水蒸気となって地球をとり巻いていた。地表温度が300℃となった時、大気中で雨滴となり地表に降りそそいだ。こうして、地表温度はさらに降下し、又雨を降らせた。こうして高いところから低いところへ、水は各種のミネラルを溶かし込み、落下する水エネルギーで岩石を移動させ、互いに衝突させて破砕し、山を削り、谷を穿って地形を変化させた。河川水は地表を彫刻して私たちが見ている地球の顔をつくった。地球の水の総量は100兆トンで、その内の97兆トンは海水、2万4千万億トンは氷、渓水は3%の3万億トンしかない。地下水は渓水の20%で、使用可能な河川水は渓水の0.4%しかない。その上毎分10万トンの水蒸気を発生させている。水は生物を生み育て、植物は1年に2千億トンもの水を飲むのである。

私はかつて新信濃川といわれる大河津分水を、建設省からの委託により、4年間にわたって調査を行ったことがあり、さらに信濃川河口の調査を石油会社から委託されたこともあったり、上流の千曲川や梓川畔をよく歩き廻ったことがあるので、信濃川をイメージして考えてみたいと思う。

まず信濃川と深い関係にある人々とは、どういう人たちかということは、信濃川に関わって直接もしくは間接に権利義務の関係がある人たちとすると、その関わり方が判然とすると思う。

まず第一に義務の方からいえば、信濃川を汚さない義務のある人たち。その人たちの住居のある場所に降った雨が、信濃川に流れ込む位置に居住する人たち。さらに生活排水が下水道を経由、浄化済下水が信濃川に放水させる地域に居住する人たち、それらの人たちは全部信濃川を汚してはならない義務を負う。と思う。

次に権利であるが、これは難しい問題を一杯含んでいる。まだ誰も気付いていないで、私だけがそう考えているんだけかもしれないものがあるかもしれない。だからその人たちアピールしてみたいと思う。当然主張できる権利であり、それが何らかの理由で妨げられているとすれば、それを現状復帰させるべきで権利があるわけだから。つまり、まず第一に、信濃川を汚してはいけない義務を負う人たちは、一方的に義務を負うばかりではなく、その反対給付として、信濃川が通常与えてくれる恵みを受ける権利があると思う。では、その恵とは何かを考えてみたい。

1.古来水田や畑に水を引いて灌漑する権利。2.飲料水として利用する権利。3.河口に近い水域にあっては舟運航行の権利。4.水辺の景観を楽しむ権利。5.水産動植物を収穫する権利、それらのそれらの中にワサビ、カワノリなどの植物や内水面漁業権のようにヤマメ、イワナ、サケ、アユ、ハユ、オイカワ、ウナギ、コイ、ナマズ、シジミなどがある。6.中・上流域における河川敷採石権、砂利を含む7.水エネルギー利用権。古くは水車を使って、低い位置にある水を、少し高い位置に移動させ灌漑に利用したり、米を搗いたり粉を挽いた。近代になって金属製の水車つまりタービンを造って水力発電に利用した。8.河川が運ぶ土砂を妨げさせない権利。これには少しばかり解説する必要がある。前7項に挙げた水力発電を行うために、電力会社はAダムを造りB河川水の流れを変え、C河川水の流量を変え、D河川水を汚染し、E本来下流へ運んでいた土砂の移動を妨げた。Fその上、水エネルギーを一方的に換金し、それを独占したが、それを平等に分配させるべきである。ここに6項を挙げて問題提起したが、私はそれらの中でE項を特に取り上げてみたいと思う。

つまり本来、電力会社がダムを造らなければ、自然の流れで運ばれていたはずの土砂が、ダムによって妨げられた。私は信濃川河口調査を行ったとき、過去百年間位の間に、新潟市の海岸線がどんなふうに後退してきたか、また地質調査の結果、将来の海岸線がどう移動するだろうかという予測がなされた。つまり、新潟市民にとって、埋没失地することを自然現象として諦める前に、正しく現状を見つめ直すべきであることを申し上げたい。つまり、汀線構成の要素には、地盤沈下や隆起の変動要素の他に、潮流が運んでくる流砂や漂砂の他に、河川が運んでくる流砂と、潮流による流失、堆砂のバランスによって、海岸線の補綴が行われる。つまり信濃川が上流から運んでいた土砂を一方的に妨げたことによる、海岸線構成要素の一方的欠落によって、大きくバランスが崩れたことは否定できない。つまり、新潟市は電力会社によって、将来的には海没させられる運命にある。ということである。

以上のことを科学的に立証するには、新潟市海岸線後退の歴史を市民から集め、過去の文献の中から探すことと、河口海域の流砂の移動や汀線移動観測を実施し、そのデータを集めることと、信濃川がもしダムなしの自然河川であった場合、毎年土砂を新潟市の河口までどれだけ運んでいたか、その運土量を計算し、要すればそれだけの土量を、ダンプで電力会社に届けさせる権利が新潟市民には存在するということが立証できると思う。

以上、ここに述べたことは、川と人とのかかわりかたについて、たくさんのケースのなかの、ほんの一部のことであるかもしれないが、これから新潟の水辺を考えていく上で、いささかの参考になればと、入会させていただいた折の感謝の気持ちとともに、この一文を献じたいと思います。

平成10年3月1日　大崎 映晋

REPORT-1 レポート1

赤塚中学校からの手紙

感謝の言葉

赤塚中学校白鳥環境愛護委員会
委員長　涌井　恵太

「第１回新潟の水辺賞」をいただき、とても嬉しく思っています。ありがとうございました。

佐潟への白鳥飛来数調査は、今も続いています。いただいた双眼鏡も役立っています。

釜に入れる前の盾
図案：相楽世話人
題字：大熊代表
製作：高橋裕雄会員

私たちの調査では、最も多かった日は2月7日（土）で約2,900羽を確認しました。毎年1月15日に行われている環境庁の調査でも2,941羽で、今年は新潟県で佐潟が最も多かったそうです。これからもたくさんの鳥がやってくる佐潟でいてほしいと思います。

悲しいこともありました。学校で飼っていた2羽の白鳥「小雪」と「吹雪」のうち、「小雪」が12月15日に死んでしまいました。前の日までは元気だったのにとても残念でした。これからは、残された「吹雪」を大切に育てていきたいと思っています。

御礼の言葉

白鳥環境愛護委員会顧問
下村　佳之

「佐潟にペリカンが来たそうですが･･･」

2月9日（月）にテレビ局から電話があり、驚きました。実は5日（木）に「学校の窓から佐潟にペリカンがいるのを見た」と生徒から情報があったのですが、私は「ペリカンではないでしょう。アオサギではないかな」と答えていたのです。後で白鳥委員の生徒に聞いてみると、6日（金）の白鳥飛来数調査の時にもいたとのことでしたが、その生徒もまさかと思っていたそうです。

その後、テレビ、新聞等でさかんに報道されるようになりました。ペリカンはまたどこかへ旅立ってしまったようですが、数ある湖沼の中で、佐潟に飛来してくれたのは嬉しいことです。

今回立派な賞をいただきましたが、これを励みに、これからも生徒と共に佐潟の自然を見つめていきたいと思います。ありがとうございました。

通船川ニュース第2号発行

通船川ニュース第2号を1998年1月付けで発行しました。発行部数は1万部で、第1号とほぼ同様に約6千部が地元の自治会を通して沿川住民へ、約3千部が周辺の小中学校と高校へ、そして沿川の企業、行政関係、マスコミへといった具合に幅広く配布されました。

4頁にわたって通船川への思いがつまった第2号

通船川ネットワークの活動紹介を主な内容とした第1号が発行されて約3ケ月、それほど多くはありませんが「通船川への関心が高まった」「これを機会に自分も活動に参加してみようと思った」など好意的な反響が寄せられています。通船川の再生を願うという、地域社会のなかでも派手さもニュース性も他に比べて際立っているわけでない通船川ネットワークの活動です。川の再生へのかなり難しい道のりを、沿川の住民や、その住民の子弟が通う学校の教師、川に係わる行政マン、そしていろいろな職業人等々が、それぞれ独立した責任ある市民の立場で知恵と汗を出し合い、ルールに則りまたはルールを作りながら進めていきます。その趣旨には何故かワクワクするものを感じます。そしてその有り様を伝えるかわら版として通船川ニュースがいよいよ真価を問われる時期に入ってゆくことを認識しています。第2号では住民の方からの投稿と沿川企業や管理施設などの取材、それにマスタープランに関する議論等を掲載しました。また既に新たな投稿や要望をいただいていますので、これらを栄養源として、第3号へむけ、スタートしようと思ってます。

通船川ニュース編集長　浅井　敬一

レポート2&お知らせ1 Report-2&Information 1

松浜水辺の楽校応援団誕生

2月23日松浜水辺の楽校応援団の設立総会が開かれ、松浜自治振興会長を団長とする総勢22名からなる強力な応援組織が誕生しました。

「水辺の楽校プロジェクト」事業は建設省所官の事業で、川を子供たちのために整備して解放し、そこで展開される水遊びや自然観察などの活動を支援してゆくことを目的にしています。

松浜小学校(松浜小遊々計画委員会)では、建設省の事業が創設される以前から、学校と周辺の施設(公園や阿賀野川の水辺など)を結んだ環境整備計画を、子供達のアイデアを基にしてつくっていました。そして、この計画を「松浜水辺の楽校」整備計画と名付けました。

昨年の暮れ、新潟市はこの整備計画の阿賀野川に係る部分を、建設省の「水辺の楽校プロジェクト」事業として登録してもらうよう申請をしました。

応援団はこのような状況の中で、すでに整備されている施設(学校の裏のアカシア公園校庭につくった緑の森、阿賀野川の学校側の堤防等)を活用して展開される、子供たちの活動を支援するためにつくられました。

応援団は、町内会長や地区公民館やPTA、漁業協同組合などの地域組織のほか、自然観察指導の専門家を主な構成としています。水辺の会の会員では、魚の井上さん、鳥の高橋さん、トンボの石月、そして社会教育の梶さんが、それぞれ個別の立場から参加しています。

2月28日には、水辺の楽校の開校に向けたシンポジウム「地域と結ぶ学校づくり～水辺の楽校の夢を育てる～」を行ないました。

教育改革の実践的指導者として名高い、武藤義男元福島県三春町教育長、自然や地域とふれ合う教育を実践・提唱して活躍中の、山之内義一郎日本ホリスティック教育協会代表の両氏をゲストとして、現在の教育の現状などにも触れながら、水辺の楽校の夢を語り会いました。

地域の歴史文化や自然を教材として、学校と市民が協力しあって、子供達一人ひとりがもっている能力をみつけて育て、生きる喜びを与えることが教育の原点であり、地域に開かれた水辺の楽校は、新しい学校づくりと、新しい地域づくりへの出発点であることを確認しあうシンポジウムとなりました。

会員のみなさん、今後自然観察指導やネイチャーゲーム、特に草刈りやクリーン作戦等々に、動員要請が発せられることになりますが、心と体の準備を整えておかれるようお願い致します。

世話人　石月　升

川風ふかれる花筏

「花筏が通ると聞いたので、万代橋まで見に行ったのに、残念。通る時間を教えてよ。」

「いやあ、チューリップの花絵づくりがあんなに楽しいとは思わなかった。」

「やすらぎ堤でチューリップに囲まれて川風にふかれる、最高だね。」

「来年は、あの花筏と一緒に船に乗って信濃川から通船川まで行ってみたいよ。」

新潟の新しい風景、花筏の誕生した日が平成9年4月29日。あの日の光景が目に浮かびます。花筏の誕生の後、出会った人からのメッセージが冒頭の会話でした。

昨年の花筏の様子(撮影:杉山泰彦)

2年目の今年。4月29日、花筏をやりましょうと"にいがた花と水のまちネットワーク"が立ち上がりました。今年は"通船川ルネッサンス21"が「やりましょう」という力強い声を発し、花と水のまちのネットワークグループ、団体も引き続き加わっています。

信濃川を走る水上バスの夢プランが目に入ったり、春鱒漁の時期が今年もまたやってくるなど、にいがたの水がわたしたちの生活や身体の一部になっている事を実感するのも、こんな時です。ビルの建ち並ぶ街の中を流れる大河に鮭漁が行われたり、鮭の子の放流が春3月に子供達の手でなされたりと、新潟の美しい風景が一つずつ確かなものとなっているようです。チューリップの花の風景がこの水と共に春と人をつつむ時、花筏は、もっと種々な可能性を持って広がるのだろうなと、心はずむ一時でもあります。

とはいえ、準備、当日と結構みんなでワイワイ楽しみながら悩んだりというのも実情です。花摘み、やすらぎ堤での花絵づくり、花染め、屋台、凧あげと、各々が出せる汗と知恵で2年目の花筏を浮かべましょう。

4月29日の多勢の方々の参加をお待ちしています。もちろん花摘みも。

にいがた花と水のまちネットワーク　田中 カツイ

Information-2 お知らせ2

農業と水辺環境

先日、母の住む田舎に帰り、ふきのとうを採りに出掛けた。

かつて戦中、戦後の子供の頃、魚を捕り、桑の実を貪り、きのこを採り、落ち穂を拾った私の原体験の場となった川や田や山や畑を思い出に浸りながら残雪を踏み歩いた。

なかんずく湿田(谷内田)のなかを曲がりくねって流れる川での魚捕りの楽しさは忘れられない。春先のまだ水の冷たい時期に岸辺をゆすり追い出した鯰をヤスで捕る豪快味、流れのよどんだ淵で手作りの竹竿に次々にかかる鮒の手応えなどは、心地よい快感として焼き付いている。

その川も様相が一変している。川は直線に深く掘られ、排水路として機能し、稲作作業を悩ました湿田を機会の入る乾田に変えた。その点では土地改良事業は農家の労働の苦しさを救ってくれた救世主ではある。

しかし、川岸は垂直の鉄板でさえぎられ、覗き込むと怖いほど流れが速い。むしろ身の危険を感じるほどだ。魚捕りはおろか近寄れない。村の子供たちには危険な場所になっているではないか。

農業の近代化という旗を掲げながら押し進めてきた農業政策の歪を我がふるさとに見つけ、私自信その仕事に携わってきたことに自責の念を深くした。

ふきのとうは家の裏でようやく見つけ大好きなふき味噌で食卓を飾ることができた。

農業生産法人育成指導センター 中村　幸夫(寄稿)

NPO(ｴﾇ･ﾋﾟｰ･ｵｰ)ってなあに？その1

NPO法案がまもなく国会で通る見通しの中で、NPOを先取りして専従のスタッフをおき活動を始めている「多摩川センター」や横浜の鶴見川ネットワークのメンバーがつくった「バクハウス」のように、水辺の会も会としてNPOの学習を始めるべきかと考えています。NPO(Non Profit Organization)が市民権を得るということは大きな意味があるので、少しづつその意味を取材し報告します。企業でも行政でもない独立セクターNPOは民間非営利組織というのが分かりやすい略です。いろんな本がでていますが林泰義氏のまとめた「NPO教書」市民によるコミュニティ開発に豊富な事例で紹介されています。少なくとも、公･私=官･民となっていることによる無理、限界を改善する大きな力になると確信しています。 近々、林さんをお呼びし新潟で“NPO学習会”を開こうかと。乞うご期待!

世話人　相楽　治

心で語ってみませんか？
映画監督　熊谷　博子さん来港

来る6月20日(土)18時(協力費500円)、新潟市万代市民会館において、通船川ネットワークが主催し、『ふれあうまち　向島･オッテンゼン物語』(熊谷博子監督)の上映会と講演会が行われる。本当のところ、これは私が熊谷さんと知り合って、まだ映画も見ないうちに決めてしまったことなのだ。

日本経済新聞本社の森野 美徳さんも都合がつけば、この日来港されるかも知れない。森野さんは現･新潟支局長の田中 保広さんが、本社地方部勤務のころ、『都市　誰のためにあるか』を一緒に書いたスタッフの一人だ。その森野さんが私に熊谷さんを紹介してくれた。

熊谷 博子さん

熊谷 博子さんは1997年「安心･安全まちづくり女性フォーラム」の発起人兼実行委員だ。10年前、熊谷さんは出産と子育ての時期、ノイローゼになってしまった。そんなとき友人に紹介されて、熊谷さんの向島通いが始まった。ドイツ･ハンブルグのオッテンゼンとの交流、路地裏の人々。「路地尊」と呼ばれる消火のための溜め桶の周りに子供たちが遊ぶ。すぐ脇を窮屈そうに車が通る。私にとって一番印象的なシーンは、町内会長が障害を持つ娘を語る場面だ。

生かされている、と感じるのは誰なのか？　淡々とした映画の描写は、『阿賀に生きる』に似ている。そう思うのはおそらく私だけではないはずだ。さあ一緒に、心で語ってみませんか？

編集鳥(長)　高橋　正良

シリーズ Serie S

新潟水辺(99)選
三川合流点

信濃川、中ノ口川、大通川と三川が交わるところから、この様に呼ばれています。

「枝」と呼ばれている三川合流下流端から見た風景
(写真右側ときめき橋・左側新潟日報社と新潟ふるさと村)

写真の地点は、出合い先端部に当たる地元では、生長する為か「枝」と呼んでいるようです。正面にときめき橋、左手にふるさと村が望まれ、広々とした展望と自然度の高さから、新潟市近郊では一押しの水辺と思われます。

長岡市下流から大河津分水の間15kmほどは、さすが信濃川は大きいと惚々するが、下流に至って、大河と美しさを感じるのは由一この合流点でしょうか。

私どもが始めた、この地点の増自然活動も白根市が主軸となり、5月にはより大きなトンボ池が掘られ、8月末にはシンポジウム開催予定となりました。

自然と人々のよりよい接点となりますよう、御協力をお願いいたします。

選者　高橋　裕雄

シリーズ環境を読む
第3回　タネンボの役割

中山間地にある昔ながらのおウチのまわりでは、小さな素掘りの溜池がよく目につきます。そのうちのひとつ、前回説明しました横井戸を水源とするタネンボ(新潟県川西町小脇集落)についてお話しします。

横井戸から流れっぱなしの水は水屋(台所・風呂など)に入り、そこで使われた水も使われなかった水も一緒にすぐ外のタネンボに溜められます。そこはおもに農機具・野菜の泥落とし、水汲みなどに使われます。流れたご飯粒などは鯉が食べ、その鯉をまた家の人が食べるという小さな食物連鎖もそこにはあります。また、融雪池となるよう屋根の雪が落ちる所につくられ、そこに流れ込むお風呂の残り湯も雪を解かすのを助けていました。

しかし、残飯・油分の増加や洗剤の普及とともに水屋からの水はタネンボで「使えない水」になりました。それでも水源から直接水をひくことで、タネンボはいまだ幾つかの役割を担っています。水との縁は簡単に切れないようです。

星名　康弘

冬のタネンボ
(新潟県川西町小脇集落)

・雪を解かしている。
・2つのタネンボのウチ、上のものは旧来。下のものは、水道の普及後、横井戸の水を最初にうける水屋のかわりとしてつくられたもの。

・写真中の左側の斜面に横井戸がある。右側の建物の手前隅部が水屋。
・洗い場になっている。
・鯉も飼っている。

夏のタネンボ
(新潟県川西町小脇集落)

MEMBER'S 会員紹介

大熊　宏子

[redacted]

この10年間、遊ぶ企画だけ参加して楽しませていただきました。後10年間ぐらいは楽しみながらも何かお役立つこともしたいと思っています。パワフル・エイジング研究会の事務局もしています。こちらの方もよろしく。

森　民夫

[redacted]

生まれは長岡です。先日、23年間勤務した建設省を退職しました。現在、長岡の先輩が経営する会社で、雨水の再利用等に取り組んでいます。

好きな水辺は、何といっても信濃川です。ツツガムシの心配をしながら遊んだものです。昨年秋まで北京で仕事をしていた関係で、三峡下りに行きましたが、白帝城から見た長江の景観は絶品です。まさに、「不尽の長江滾々として来る」という感じでした。

若山　拓也

[redacted]

生まれも育ちも埼玉県大宮市なのですが、佐渡の白鳥の取り持つ縁から、これまで細く長く新潟に関わり続けてきました。今は、岩手第2に高峰、早地峰山の麓に住んでいます。趣味は、写真。

ホタル、ゲンゴロウ、カジカ、サワガニの住む水辺はみんな大好き。推すなら佐渡ですね。

高嶋　康之

[redacted]

新潟に引っ越して1年半になりました。来てすぐに舟で阿賀野川ライン下りの観光をしました。約1時間くらいの乗舟でしたが、周りの景色の素晴しさに感動いたしました。5年前に中国の山峡下りをした時の事を思い浮かべながら、スケールこそ違いますが、心に残る感激は同じだと思いました。今後共宜しくお願い致します。

南部　泰正

[redacted]

何らかの方法で環境問題について考えてみたいと思い、入会させていただきました。

学生時代を東京で過ごし、今年戻って来たばかりなので、新潟の自然の豊かさをつくづく感じている毎日です。また外で体を動かすことが大好きなので、様々なイベントに出席したいと思っております。皆様宜しくご指導の程お願い致します。

新井　一仁

[redacted]

角田山の麓、エチゴ地ビール、じょんのび温泉のすぐ近くの巻町福井出身。現在は家族4人で新潟市在住。毎朝、信濃川を眺めながらの通勤。本川大橋下流のちょっとしたアシのしげみの周りに集ってくるハクチョウやカモを見るのが楽しみ。

会員紹介 MEMBER'S

長谷　圭子

[redacted]

中ノ口川の辺で18才迄育ちました。中学生の夏、新潟県下を集中豪雨が襲い、土色と化した中ノ口川に、ぷかぷかと浮かぶように流されてきた錦鯉の大群。今、想うと金、銀、赤の錦鯉達はどこへ流され辿り着いたのでしょう。帰省する度に再会する中ノ口川は、今もゆったりとその変わらない水の流れにほっとします。

水辺研究会の2人の学生に腕を組んでもらって大満足でした。

杉田　収

[redacted]

看護短大の学生と「水研究会」をつくり、水道水、飲料水（ミネラルウォーター類）、関川の水に含まれる活性酸素物質を測定しています。また教員有志で「快適住まい環境研究会」を作っています。私たちがどんな状況になっても、安心して生活できる住環境と、街の環境を目指しています。

生まれと育ちは東頸城郡浦川原村です。保倉川はアユが泳ぐ清流でした。子供の頃は手製のヤス（竹筒とゴム、丈夫な針金でつくりました）で、夏は手足がフヤケルまで遊びました。秋は毛ガニが良く採れました。

五十嵐　正人

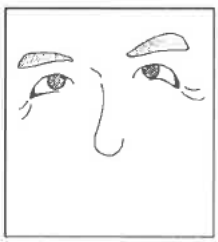
[redacted]

信濃川、中ノ口川、大通川の三川合流点の近所に住んでいます。この辺は昔、鷺の木桜遊園といわれていました。水門の改修はされましたが、桜は健在です。ぜひ、花見をご一緒しましょう。

大崎　映晋

[redacted]

海や川、湖の水中調査を初めての頃は、趣味でやっていたのが、いつかライフワークになり、若い頃信濃川河口、新信濃川、千曲川、梓川などの調査をやってきたので、そんな話題で話し合う場があれないいなと常々考えていました。好きな水辺は土樽の奥、万太郎谷のヤマメやイワナの棲む渓流にあこがれています。



重住　斉

[redacted]

生まれ出雲崎町です。（越後線・出雲崎駅の近く）自然の多い中で育ちましたが、この会でいろいろな事を勉強し、体験したいです。

二階堂　英子

[redacted]

東京生まれ。横浜から新潟に来て5年目。散歩、音楽を聞きながら山野草を描くのが趣味です。阿賀野のほとり、美しい柳の新芽、雪どけ水が床固め（横越町）に波立ちを作る光景は、水の豊かさに感動を覚えます。通船川も興味を持っています。

EVENT INFORMATION

水辺の会関連98年活動予定

▲4月4日　三川の森ウオッチング
細越集会場/午前10時～/弁当持参/問:水辺の会尾形世話人

▲4月17日(金)　熊本発　第1回水環境復元全国大会～水前寺のりが訴える地球の危機～
熊本市民会館/500円/問:梨子木096-386-1604

▲4月29日(水)　にいがた花と水のまちネットワーク・花筏づくり　(28日花摘み)
問:松橋さん/025-270-8809

▲4月　通船川・栗ノ木川下流再生検討市民会議が始まるよ!

▲4月～6月　佐潟クリーンアップ作戦/地元の方々と一緒に清掃活動

▲5月　佐潟水鳥センターのオープン後に「佐潟を考えるフォーラム」を地元の漁協、農協、商工会、学校、公民館、佐潟に関係する団体、個人と一緒に
開催/石月世話人

▲5月　都市河川とNPOの学習会/講師:林泰義氏(NPO教書著者)の予定
問:相楽世話人

▲5月末　阿賀野川下り／阿賀野川工事事務所

▲6月　川巡り・水辺ウオッチング
候補?五十嵐川、新発田川、西谷川、柿川、青田川、矢代川など?

▲6月　栗ノ木川クリーンアップ作戦
東新潟中学校、地元の方々と一緒に清掃活動/問:新潟市東地区公民館/025-241-4119

▲6月20日(土)午後6時～「ふれあうまち向島・オッテンゼン物語」上映と熊谷博子監督講演会
協力費500円/新潟市万代市民会館6階ホール/問:新潟市東地区公民館/025-241-4119

▲7月　通船川・阿賀野川カヌー川下り大会
新潟市本所～津島屋閘門～山ノ下閘門/カヌー指導水辺の会高橋裕雄世話人

▲7月　白神山地十二湖ウオッチング/梶世話人

▲8月　新潟市外の河川・湖沼視察/森本世話人

▲8月　Eボート大会参加/相楽世話人

▲9月　都市河川学習会
通船川ネットワーク/問:新潟市東地区公民館/025-241-4119

▲9月6日　阿賀野川レガッタ参加
津川町/相楽世話人

▲9月12日(土)　通船川クリーンアップ作戦
東山の下小学校、藤見中学校、地元企業、大江山漁協、地元住民/問星島世話人/025-241-4119

▲9月12日(土)　佐潟ハス採り大会/石月世話人

▲9月13日(日)　佐潟のハスを食べ潟るワークショップ全国都市緑化フェア『新潟緑のものがたり98』県テーマ会場/石月世話人

▲9月　世界の水辺:中国桂林の水辺を考える学習会
講師:大熊会長

▲10月3日(土)～7日(水)中国『上海・桂林5日間の旅』
問:高橋正良編集鳥(長)/025-234-1153

▲10月24日(土)水辺シンポジウム98～都市河川:佐潟・通船川の再生へ向けて～
新潟市万代市民会館/午後から/ゲスト未定・「鶴見川バクハウス」大沢氏/信濃川ウォーターシャトル栗原氏/通船川ネットワーク梶代表/佐潟フォーラムの高野さんなど(予定)

上海・桂林の旅　－夢に見た山水画の世界　あこがれの、あの桂林－

新潟の水辺を考える会初めての海外ツアー

企画は1997年10月末旅行経験の高橋編集鳥(長)

1998年10月3日(土)～10月7日(水)・4泊5日

上海は高級ホテルに感激!!　桂林は漓江下りに驚嘆!!

新潟空港発着－159,000円(税別)

(一人部屋の場合25,000円追加)

近畿日本ツーリストと綿密な打ち合わせ中

詳細は決定次第お知らせ

～これからでも遅くない、貯金しておきましょう～

編集後記

会員数がとうとう200人を越えてしまいました。図体が大きくなると小回りが効かなくなります。事務局や編集局には各地の水辺仲間からいろいろな連絡が入ります。水辺たよりだけでは会員のみなさんにタイムリーな情報をお伝えできないのが悩みの種となっています。ファックスや電子メールアドレスをお持ちの方は事務局までお知らせください。

通船川ネットワークもいよいよ行政の呼びかけによる市民会議に参加することになりました。地元密着でこつこつつくり上げる住民参加の川づくりは、本当に時間と手間がかかります。川をつくることが実はコミニュケーションをつくり、地域をつくることになります。お互い顔が見える地域が安心と安全のまちになります。誰かに守ってもらうのではない、自分たちで守る地域。誰かに良くしてもらうのではない、自分たちで良くしていく地域。これを通船川流域としたいものです。

信濃川ウォーターシャトル株式会社社会社が3月20日設立しました。水の都新潟にふさわしい信濃川との接し方を考え、行動する良い機会です。私も船主に名乗りを上げました。

編集鳥(長)高橋 正良　masayosi@on.rim.or.jp

●事務局　株式会社グリーンシグマ内(OZE0677@niftyserve.or.jp)
〒950-2111 新潟市大学南1丁目7821-5
Phone 025-263-2733 Fax 025-263-1134
●編　集　株式会社サザンウインド内
〒951-8134 新潟市関屋1422-10
Phone 025-234-1153 Fax 025-234-1173
●U R L　http://www.on.rim.or.jp/~sugiyama/mizube.html